

平成9年度入学試験における合否入れ替わり率、推薦入試への自己推薦書の導入および医学科併願者の成績評価

佐賀医科大学 小橋 修, 堀 勝治

はじめに

本年度から、従来のB日程から分離分割方式となり入学募集人員95名の内訳は推薦25名(12月試験, センター試験免除), 前期35名, 後期35名と、ほぼ均等分配された。2次試験の特徴は前期日程では論文形式の出題をし、後期日程では総合問題によるテストを実施し、試験の多様化により多様な学生を選抜するという主旨にそった入試方式が実施された。さらに看護学科は新設された平成4年度からA日程で実施されてきたが、平成9年度からは医学科と同様に前期(30名), 後期(30名)日程で実施された。問題作成にあたっては、2次試験問題作成委員は推薦部会, 前期小論文部会, 後期総合問題部会と別れているが、委員の負担を少なくするために、医学科と看護学科には一部共通の資料を与え共通の設問作成をし、医学科看護学科にそれぞれに相応しいと思われる別個の設問を加え作成した。共通の設問があるので、これらの成績を例えばセンターテストの成績と比較することも可能である。今回は推薦入試成績に自己推薦書(A4版の用紙に、学生自身が自分について自由に書いてもらう)を導入した経緯と、3回の入試のチャンス少なくとも2回以上本学のテストを受験した医学科受験生の成績についても報告する。

対象と方法

平成9年度本学の入学試験を受験した学生を対象とした。推薦入試は133名, 前期医学科は155名, 前期看護学科は129名, 後期医学科

は214名, 後期看護学科は92名について入学試験成績をもとに統計処理をした。推薦入試では、センターテストを課していない代わりに、一次審査として高校からの推薦書, 調査書(評定点と, 学業成績)にて書類審査をし、この配点と、2次試験として面接および総合問題的な小論文(学力テスト)の各評価点の合計の総合点で入学の合否が決まる。本年度は推薦書の提出に対して、高校からの推薦書プラス、学生自身の書いた自己推薦書の提出を求め評価した。一般選抜試験(前期, 後期日程)では、センターテスト, 面接, 調査書(推薦入試と違って評定点のみ), 2次試験として前期はできるだけ小論文的なもので、小論文1は医学科・看護学科共通の設問, 小論文2は別個の問題, 後期試験は、資料を読んでその中で十分に考えさせて解答させるという総合問題を課し、前期と同様な出題方式とした。配点は一般選抜は全く同じで総点が1030点である。推薦の総点は250点であるが、一般選抜にくらべ面接点, 調査書点, 推薦書の配点比率は高くしてある。

結果

1. 平成9年度推薦入試の成績に関する基本統計, 相関係数, 箱ひげ図

表1(A, B, C)および図1(A, B)は推薦入試の成績に関する基本統計及び箱ひげ図である。表2および図2(A, B)は推薦入試の相関表と散布図である。まず合格者と不合格者に関してはいずれの項目の平均値も合格者の方がはるかによい点をとっている。総点と小論文点の相関係数は0.844で、推薦入

試は基本的には小論文によって強く選抜されていることを示唆している。一方、小論文と一次選抜点(推薦書, 学業, 調査書の合計点)の散布図を見ると、一次選抜点の悪い受験生で合格できたものは小論文の成績が圧倒的に高得点であった学生である。個別に見ると、受験高校からの推薦学生や九州以外の遠方からの受験生がこの範疇に入っていた。

2. 平成9年度一般選抜試験(前期と後期)の成績に関する基本統計, 相関係数, 箱ひげ図

表3(A, B)と箱ひげ図3は医学科前期日程と後期日程それぞれの合格者の成績に関する基本統計である。センターテストに関しては後期が平均点で10点ほど高いが、この差は最小値の得点によることがわかる。前期の小論文と後期の総合問題では後期の方が平均値, 最小値, 最大値すべての点で高い。調査書と面接に関してはあまり大きな差は見られなかった。

表4(A, B, C)(前期)と表5(A, B, C)(後期)は、それぞれ前期と後期の受験者および合格者と不合格者の相関係数表である。前期合格者の特徴は総点とセンター点, 総点と小論文の相関係数が、0.245, 0.511であるが、後期合格者については総点とセンター点, 総点と総合問題の相関係数は0.642と0.668であった。

一般選抜においては、前期日程では総点との相関係数はセンターテストが最も高く、ついで調査書, 面接で最後が小論文であった。センターテストが学力を見ているとすれば、小論文は別の能力を見ている結果と言えるかも知れない。後期日程ではセンターテストの相関が最も高く、ついで総合問題, 調査書, 面接となっている。前期小論文と後期総合問題を内容的に比較すると、後期の総合問題は学力を測定している傾向が強いので、センターテストとの相関の強いこともうなずける結果であった。

3. 平成9年度入試における合否入れ替わり(表6)

(A) 推薦入試では、一次審査として高校の調査書, 学業成績, 及び推薦書を評価の対象にして6名の担当教官が独自に採点をする(最高点は100)。その後2次試験として小論文(120点), 面接(30点)が行なわれ、これらの総合点250点が与えられる。表6に見られるように、入れ替わり率は小論文試験は64%, 面接は24%, 一次選抜点は20%(記載していないが、推薦書20%, 調査書と学業は共に16%)であった。すなわち小論文試験によって64%の受験生が振り分けられていることを示し、一次試験(学業, 推薦書, 調査書)ではわずかに20%が入れ替わるのみで、面接による振り分けよりも低いことが判明した。本学の目的は、地域医療に貢献できる医師を養成することにあつたので、推薦入試ではできるだけ佐賀県在住の高校からの推薦者を優先する試みではじめられた。そのため、一次試験と面接において潜在意識的にバイアスがかかる事は否めなかった。しかしセンターテストを課さない代わりに学力を見る目的で小論文試験を行なってきたが、この小論文テストによる選抜効果が大であることが判明した。データには示していないが、小論文成績が総点に占める比率が高い事も反映して小論文と総点との相関係数は0.844であり、小論文成績と一次試験との相関は逆に-0.653(合格者), -0.162(不合格者)である。合格者では一次試験の悪い人が小論文成績がよいという結果である。これは一次試験の悪い人は小論文がよほどよい人でないと入学できないという事でもある。

(B) 一般選抜試験(前期日程, 後期日程)の合否入れ替わり率については、同じく表6に示されているように、センター試験なしの時の合否入れ替わり率は33.3%~34.5%。ついで、医学科前期の2次小論文試験なしの25.

7%であった。調査書及び面接なしの時の合否入れ替わり率は10%内外であった。基本的には学力を重視し、1割前後は調査書ないしは面接で振り分ける結果となっていると解釈できるのでこのような比率での合否入れ替わり率は本学の入学選抜方法としてはまずまずの成果であると考えたい。

4. 本学を2回以上併願した学生についてのケースレポート

本学の試験を2種類以上併願受験した学生というのは、時間的に早い試験で不合格になった学生である。これらの学生が対象ではあるが、センターテストの成績と調査書成績は共通であり、面接点は面接官が異なること、小論文成績、総合問題成績などを比較検討することができるので、ここに検討の一部を報告する。推薦、前期日程、後期日程において併願学生のなかには5種類ほどの異なる組み合わせの受験をした学生がいた。1) 本学の推薦入試で不合格、前期日程で不合格で後期日程を受験した学生(3名)、2) 推薦入試で不合格の学生で、前期日程を受けた学生(11名)、3) 推薦入試不合格で、前期は受けなかったが後期日程を受験した学生(7名)、4) 推薦入試不合格で、看護科の前期日程を受験した学生(2名)、5) 推薦入試は受けていなくて、前期日程不合格で後期日程を受けた学生(80名)の5種類の併願学生群が見られた。例えば、推薦一次テスト不合格者で前期日程上位合格。推薦不合格11名のうち前期医学科合格者4名、推薦不合格者10名中、後期合格者なし(この中に前期、後期とも受けたものは3名で不合格)。推薦不合格で後期看護科を受けたものは1名で合格。前期医学科不合格で後期看護科合格者1名などである。

前期医学科不合格者で後期受験したものは43名、うち合格者2名(後期受験総数214名)。ちなみに看護科では前期不合格者で後期受験したものの37名のうち合格者8名(後期全

受験者92名)であった。

5. 自己推薦書の評価(表7)

医学科の推薦入試において、本学は高校からの推薦書、調査書をもとにこれを評価してきたが、推薦書に関しては、高校からの一通の推薦書のみでは十分ではないと判断され、かつ帰国子女の推薦書(イギリス、アメリカなどからの推薦書)に見られるような学生の真の姿が彷彿とするような推薦書を期待して、高校の担当教官からの推薦書(5教科担当のうちから3教科分の推薦書)を評価対象としてきた。この推薦書にはそれなりの価値が認められたが、二つの点から中止し、本年度のような受験生自身が書く自己推薦書に切り替えられた。この自己推薦書は学生の姿がつかみやすいという評価であったので、次年度も継続し入学後の学内成績の追跡調査を今続ける方針である。

6. 入学後のアンケート調査(表8)

本学では開校以来、全新生に対して入学時の学生の意識調査をしている。本年度の新入生に対するアンケート調査のうち大学入試の第一志望のみについて抜粋してまとめた。推薦入学生は基本的に本学入学希望者であるので、面接、小論文のテストに対して肯定的な評価を与えているが、受験動機の一つにセンターテストがないこと、自宅から近いことなどが多い。一般前期入学者では、60%強の学生は予想が外れた問題であったにもかかわらず、肯定的評価をしている。センターテストがよければ上位大学を受験したかったという点から安全思考型である。一般後期入学生は試験問題に対して覚めた客観的な評価をしている。前期で他大学を志望した学生が50%強いて、受験動機もセンターテストを失敗したから、経済的理由で浪人出来ないためなどの理由が目立つ。前期と後期併願の入学生は、センターテストの成績でやむなく志望した学

生とはじめから第一志望の学生が半々であった。総じて肯定的であった。

考察

本年度の入試においては、(1)推薦入試に自己推薦書を導入したこと、(2)B日程から分離分割方式に移行したことから、医学科の問題と看護学科の問題作成をせねばならず、入試委員会の負担は大変であったこと、(3)後期日程の総合問題は、従来からの問題作成と同じであることから、問題作成と成績評価に問題の指摘なかったが、(4)前期日程の小論文は、本来的な小論文とはなせず、知識の量も問うといった中途半端なものになるのではないかとの危惧をもったまま実施された。しかしながら、本学の入試委員会及び入選研において、今回の入試成績を分析、検討した結果、おおむね満足すべき評価が出来たのではないかと判断された。

まとめ

- (1) 平成6年度には、推薦入学、一般入学を問わず、一般教育課程終了時までの学内成績がその後卒業時までの学内成績を左右し、入試の成績よりも入学後の勉学に対する積極性、やる気その後の成績を左右する重要な要因であることを発表した。
- (2) 平成7年度は高校の調査書評定値の成績と学内成績、履修状況、医師国家試験合格率等の追跡調査をし、高等学校に学校格差があるとしても、調査書評定値のよい学生の学内成績はよく、各教科目履修状況における不合格科目数も少ない傾向が見られ、逆に評定値の悪い学生は不合格科目数が多い傾向を示した。学卒者が最もよい成績を示した。現役生は、学内成績、履修状況もよく、国試合格率もよい。大学中退者や、多浪になるにつれ、学内成績も国家試験合格率も悪い傾向を示した。一方、推薦生は高校の調査書のA段階のなかから推薦されているので、総じて真面目に

勉強しているために学内成績もよい傾向を示すことを報告した。

(3) 平成8年度は、次年度に始まる論文形式の問題に対する傾向と対策を検討するため、従来行われてきた設問のなかから論文形式に妥当するものをピックアップしてその成績と学内成績との関係を検討し、これらの設問に関して入学者のみの成績では不合格者を含めた受験生の母集団を反映できていないことが判明した。結局入学試験、医師国家試験など、基本的には知識に関する情報量をテストする評価法で、人の評価をするときには限界があることが示めされた。

(4) 平成9年度は推薦入試、前期試験、後期試験と多様な選抜方法をとった初年度であるため十分な解析ができたとはいえないが、問題配点、調査書点、面接点等の配点比率をどのようにするかについての一応の目安ができたと考えている。一方、募集人員に関して推薦25名、前期35名、後期35（帰国子女若干名を含む）の比率はこれでよいのかについては、入学者の学内成績の追跡調査をすることに判断せざるを得ない。

謝辞

入試成績のデータ入力、データ処理に関しては本学の学生課の中島、中島、久保山、及び微生物学教室南部事務官のご協力に深謝いたします。

表1 平成9年推薦入試受験者の成績（基本統計）

	平均	標準偏差	例数	最小値	最大値
総得点	152.6	20.2	133	102.0	197.0
学業	15.5	6.0	133	2.0	32.0
推薦書	21.8	2.5	133	16.0	28.0
調査書	30.0	4.5	133	15.0	37.0
小論文	65.5	16.6	133	20.0	110.0
面接	19.8	3.7	133	6.0	28.0

合否別

	平均	標準偏差	例数	最小値	最大値
総得点, 合計	152.6	20.2	133	102.0	197.0
総得点, 合	179.4	6.8	25	172.5	197.0
総得点, 不	146.4	16.9	108	102.0	172.0
小論文, 合計	65.5	16.6	133	20.0	110.0
小論文, 合	84.8	9.5	25	60.0	110.0
小論文, 不	61.0	14.6	108	20.0	93.0

	平均	標準偏差	例数	最小値	最大値
学業, 合計	15.5	6.0	133	2.0	32.0
学業, 合	17.4	6.1	25	7.0	31.0
学業, 不	15.0	5.9	108	2.0	32.0
推薦書, 合計	21.8	2.5	133	16.0	28.0
推薦書, 合	23.4	2.1	25	20.0	28.0
推薦書, 不	21.5	2.4	108	16.0	27.0
調査書, 合計	30.0	4.5	133	15.0	37.0
調査書, 合	31.5	3.8	25	24.0	37.0
調査書, 不	29.6	4.6	108	15.0	37.0
面接, 合計	19.8	3.7	133	6.0	28.0
面接, 合	22.2	3.6	25	16.0	28.0
面接, 不	19.3	3.6	108	6.0	28.0

図1

箱ヒゲ図：合否別

○ 合
◐ 不

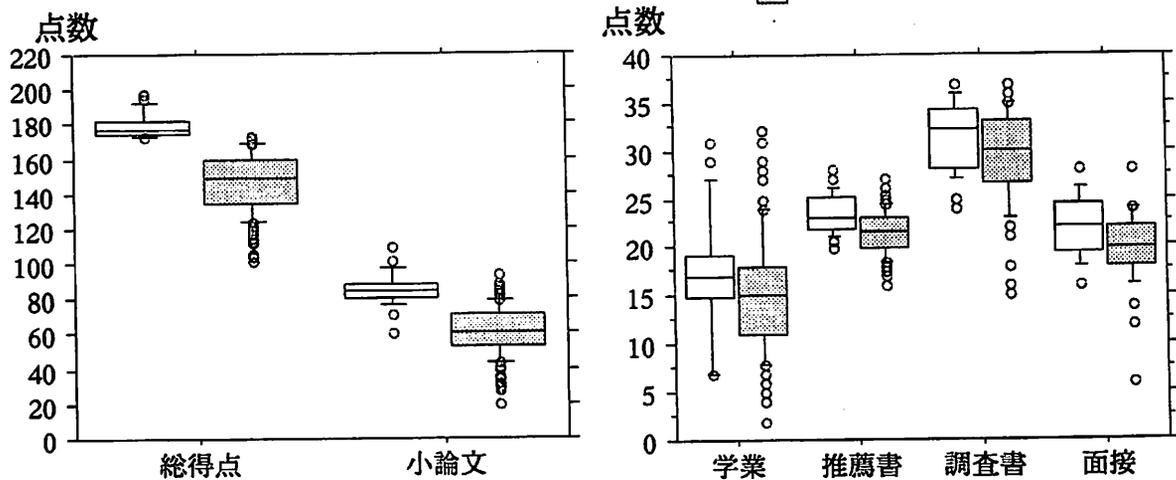


表3 平成9年度医学科一般選抜前期と後期入試合格者成績の基本統計

A

	総点前	総点後	センター点前	センター点后	小論文前	総合問題
平均	835.3	854.6	550.9	560.9	148.9	156.5
標準偏差	18.5	18.7	13.3	12.9	17.5	13.0
標準誤差	3.1	3.3	2.3	2.3	3.0	2.3
例数	35	32	35	32	35	32
最小値	808.0	829.8	522.0	531.3	117.0	133.0
最大値	884.0	905.1	583.0	586.6	186.0	196.0
欠測値の数	0	3	0	3	0	3

B

	調査書前	調査書後	面接	面接
平均	92.2	94.9	43.3	42.4
標準偏差	7.9	5.7	6.2	7.8
標準誤差	1.3	1.0	1.0	1.4
例数	35	32	35	32
最小値	71.0	71.0	32.0	28.0
最大値	100.0	100.0	60.0	60.0
欠測値の数	0	3	0	3

図3 医学科前期と後期の成績の箱ヒゲ図

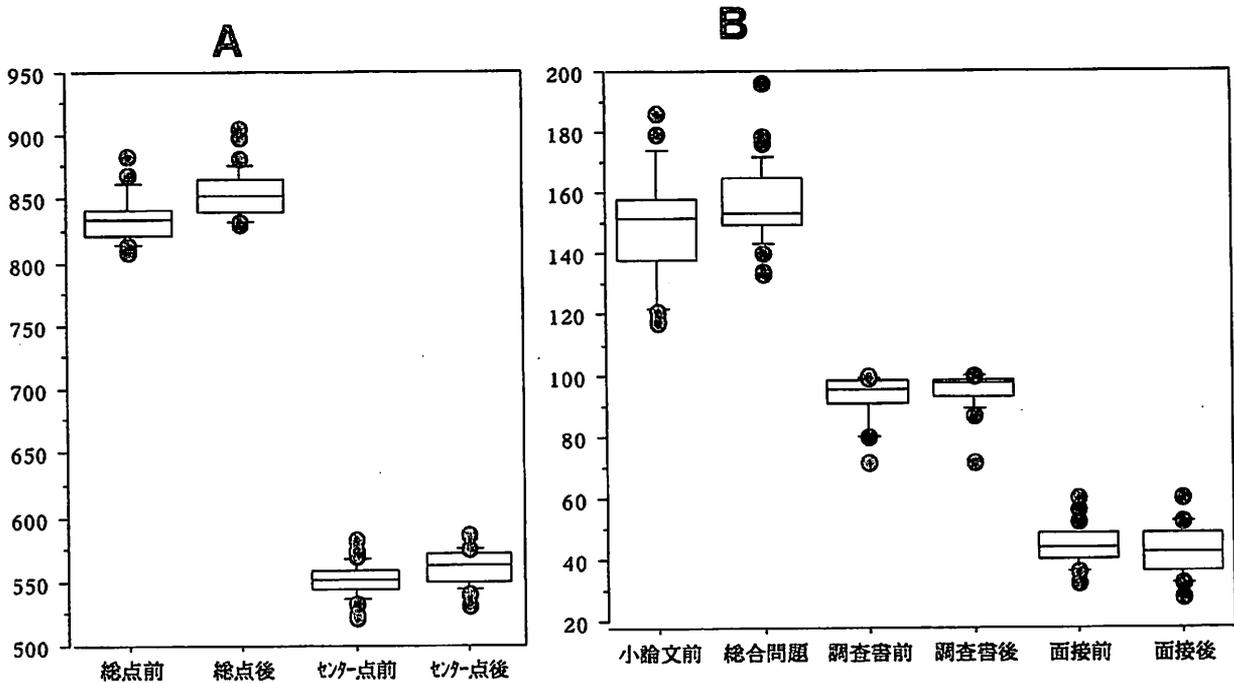


表7 入学後の自己推薦書についてのアンケート調査結果

A

自己推薦書を書くに当たって相談をしましたか？	
1. 誰の助けも受けずに自分で書いた	6
2. 高校の先生の指導を受けた	19
3. 一部、親の意見を入れた	1
4. 友人、先輩と対策を練った	0
5. その他	1

B

<p>自己推薦書を書くに当たっての入学生の感想（抜粋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分について、人に読んでもらうように、また人にアピールするように書くことに戸惑いを感じた。 ・自分について書くのに慣れていないので恥ずかしい気持ちが強かった ・自分の目的をはっきりさせるのに大変役立った ・自分のことを知ってもらうのによりチャンスを与えられた <p>調査委員会が自己推薦書を読んだ感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校教官からの推薦書は、総花的で、どの高校からのものも似たり寄ったり、 ・医学部に推薦するため共通したキーワードがちりばめられていて、定型化している ・教官の文章力のみが前面に出て、受験生の顔が見えにくい ・それに反して自己推薦書は従来の推薦書にない、新鮮さがあり、 ・受験生自身のことがよくつかめる利点が見られた

表8 入学直後の意識調査

入試選抜法	志望調査	理由	問題に対する評価
推薦入試	第一志望	<ul style="list-style-type: none"> ・センターテスト免除 ・一般選抜に自信がない ・自宅から近い、経済的理由 	面接・小論文等に対して前向きな肯定的評価
一般前期	60%以上が第一志望	<ul style="list-style-type: none"> ・センターテスト成績で合格圏ねらい ・本当はもっと上位大学志望 ・より安全志向型 	小論文にこれまでと違って全く英語の論文がでなかったことに驚きは示したが、肯定的にそれでもよかったと受け止めている
一般後期	半数以上が第二志望	<ul style="list-style-type: none"> ・他大学志望者が多い ・センターテストに失敗した ・前期を失敗した。 ・経済的理由で本学を選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・覚めた評価を問題にも、自分にもしている。 ・肯定もあるが、どちらかという批判的評価が目立つ。
併願	第一志望とそれ以外が半々	<ul style="list-style-type: none"> ・センターテストの成績でやむを得ず受験した。 ・それ以外の理由からどうしても本学に入りたい 	総じて肯定的